

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会だより

第4号 2003年11月30日

名戸ヶ谷ビオトープを育てる会発行

発行責任者： 篠崎 将 Tel/Fax: 04-7173-6353

収穫祭特集 収穫の味を楽しむ

「育てる会」の収穫祭は11月29日にビオトープの「木村邸作業場」をお借りして行われました。生憎の雨でしたが、シートで仮設テントをつくり、30名弱のみなさんが出席しました。各種のお餅やお雑煮、バーベキュー、持込のお酒もあり、みんなで収穫の味を楽しみました。みなさん本当にご苦労さまでした。(小笠原 智)



雨の中、ブルーシートを張って収穫祭



つくたての餅を並べる小岩井・増田さん

「不耕起稲作部会」の収穫祭は小雨の中、「水田稲作部会」と合同で、11月29日に決行しました。小岩井さん、増田さんに餅の準備をして頂きました。黄粉、餡、辛味餅。つくたての餅はとても美味しく、好評でした。焼き肉、鰯のチャンチャン焼き、不耕起米のおにぎり、川田名人による味付けの「雑煮」等、みなさん満足、満足でした。また、不耕起米を即売しました。今回は予約販売が中心でしたので、すぐに品切れになりました。(才川 寿磨)

不耕起稲作部会

現在、水田は姫米が青々としています。ダイサギが来て、器用に餌を捕って食べています。カラスが羨ましそうに眺めていますが、餌にありつけません。ダイサギから横取りしようとはしますが、失敗です。さすがのカラスも水中の生きた獲物を狩りすることはダメなようです。散布した稲藁が深緑の藻に変身してきました。どんな生きものが発生するか楽しみです。

1. 畦の補修・稲藁の散布・水張り:

- ・畦の補修: 水管理をしながら今後も続けていきます。
- ・稲藁の散布: 脱穀後の稲藁を約10cmに切断して水田に散布しました。稲藁は水中で一部は藻(サヤミドロ)となり、光合成を行い、水中に酸素を供給します。メダカをはじめ多くの生きものが住めるのです。
- ・水張り、冬季灌水: 不耕起栽培の特徴の一つです。稲藁などが酸素の豊かな水中で分解してメタンガスの発生が少なくなり、水田の土壌を豊かにし、水田から流出する水は酸素が豊富で下流を浄化します。

2. 籾米からの精米・籾糠に散布:

- ・籾米からの精米: 不耕起稲作部会の米は現在籾の状態です。籾から直接精米する「ライスセンター」に精米をお願いしています。籾殻は糠と一緒に粉となりました。
- ・籾糠の散布: 肥料の役目として籾糠を散布します。糸ミズの餌となり、糸ミズの糞が土壌を豊かにします。糸ミズはメダカなどの餌になります。

3. 稲藁細工: お正月用の飾り作りを計画しています。(才川 寿磨)



正月の稲藁細工用に

あんこ餅をたべると頭がよくなるよ！

名戸ヶ谷小学校で餅つき



11月15日、名戸ヶ谷小学校5年生のみなさんが前日から準備した餅つきの用意が整っています。竈で餅米を蒸かしたり、杵で餅をついたり、あんこや黄粉にまぶしたり、大根おろしで辛味もちを作ったり、初めての経験だったことでしょう。小岩井さん、増田さんをはじめ、「ピオトープを育てる会」のみなさんの早朝からの協力で、万事順調に進みました。お椀に黄粉餅を一杯に盛って食べている子、海苔餅だけを食べている子、みんな満足そうでした。昼前には全校生徒や父兄のみなさんもやってきて、約70キロがお腹の中に消えてしまいました。泥んこの田んぼで汗を流して頑張った甲斐がありましたね。また、5年生全員による元気よい「餅つき踊り」も披露され、みなさんの拍手の中で、「ピオトープを育てる会」への感謝のコトバが生徒代表から、小岩井さん、それに篠崎会長に対して述べられました。
(小笠原 智)

「手賀沼流域フォーラム」に参加して

9月になって突然知らされて10月4日、「手賀沼流域フォーラム」に参加しました。秋の運動会の準備と平行して大急ぎで計画・準備に取り掛かりました。土曜日の発表ということで、子どもたちも塾や習い事で忙しく、参加者をすぐに決められないことも悩みの種でした。発表後、子どもたちの満足そうな表情を見て、ほっと胸をなでおろしました。幸い、我孫子市、柏市、沼南町、を代表した3つの小学校の発表の中で、一番よかった、と好評でした。ピオトープでの「田植え」「雑草とり」「稲刈り」「生きもの観察会」などの様子を会場のみなさんにビデオで紹介しました。4年生がピオトープにたてた「黄色い看板」も紹介しました。(中村 正照)



発表する名戸ヶ谷小の4年生

生徒の感想文から：

「僕は手賀沼流域フォーラム」に参加しました。そのときはうきうきしていたものの、舞台裏で待っているときはとても緊張しました。でもステージの上で発表しているときは落ち着いてできたので、よかったと思います」
(名戸ヶ谷小学校 4年1組 浅野亜門)

「手賀沼ふれあいウオーク2003」参加

11月16日(日)、柏市、我孫子市、沼南町共催により行われた「手賀沼ふれあいウオーク2003」に企画展示で参加しました。柏会場となった柏ふるさと公園には26張りのテントが並び、心配された天気も快晴となり、気温も日中は20度を超え、絶好のウォーキング日和となりました。ピオトープを育てる会としては初めての参加ですが、3枚のパネルに活動内容と、植物および生きもの写真を展示し、多くの市民に見ていただき、会場での入会希望者もありました。午後からは少々風が強くなり、パネルが度々倒れるというハプニングもあり、来年は展示方法を再検討する必要があるようです。(篠崎 将)



ピオトープの展示

人のくらしと水辺

人にとっても、生きものにとっても、健全な水辺にするためには、昔からそこに住んでいた生きものたちが好む環境づくりという目標が必要です。生きもののない水辺は健全とは言えないからです。高度経済成長期以前にどこでも見られた田圃を中心とした里山は、人の生活と、農作物の生産と、生きものの生活、が共存していました。人手の加えられた環境であっても、多くの種類の生物が環境に適応し、結果として生物の多様性を維持できる理想のビオトープでした。我々の世代でメダカが身近だったのは、小さな小川や田圃でメダカ取りをした経験からだと思います。メダカは緩やかな流れを好み、水温25度以上で水草に産卵するので、河川や池よりもむしろ田圃とその周辺が適しているのです。名戸ヶ谷ビオトープで見つかったモツゴも、水位変動によって産卵誘発されると言われています。毎年春になると出現する田圃は淡水魚にとって重要な水辺であると言えることが出来ます。生きものが生まれ育って、いきいきと生活し、親子ともども雑魚を追いかけたり、野草を摘んだりして、その収穫が、ときには食卓に上がり、安心して食べることが出来るような水辺が各地に現れることを願ってやみません。（篠崎 将）



ビオトープに姿を見せたダイサギ

名戸ヶ谷の昔

木村きくさん(80歳)談 (自宅にて)



昔はここからずっと中新宿まで田圃で、藤心の先(今の駅のある辺り)は腰まで水が深かった。今の名戸ヶ谷病院の駐車場のフェンスとヨシの間は川だったけれど、或る日、水の堰が真っ白になったので驚いたね。光が丘団地ができて、その石鹸水がここへ流れてきたんだね。その頃かな、田圃が汚れて、虫が湧いて…そうだねえ、かれこれもう40年になるかねえ。ホタルのこと？今じゃウソみたい。今20歳になる孫が生まれた頃は、今は道路になっているあたりの草むらに、みんなで莫蔭を敷いて、寝ながらホタルを見たものだよ。窓に降りかかる雪のようにホタルは沢山いたね。どこからって、湧き水の辺りからも、鈴木さんの前のホタルのせせらぎの辺りからも。

バタッといなくなったのは、東武の駐車場ができてからだね。ライトがあるとホタルはダメだからね。ウチじゃ区画整理をしなかったし、農薬を使わなかったからホタルは少し残っていたね。今年は3つ4つ姿を見たが、ほんとにみかけなくなったね。雑草のせいと思うね。何年か前まで市が「四阿」のところで「ホタル祭り」をしていたけれど、それからホタルがいなくなったね。持って帰ってしまう人がいるのかねえ。水はいいんだから、面倒をみることだね。土手を掘り返してホタルの卵を埋めてしまっはいけないねえ。（文責 広報部）

掲示板 (お米の配布： いずれも締め切りは12月15日)

不耕起「米」を希望者へ配布することにしました。今後の活動の浄財として、1kg 当たり500円の寄付金を頂くことにしました。希望者はkg 単位で才川さんへ申し込んでください。

Tel/Fax: 04-7169-1039. E-mail: marosaikawa@jcom.home.ne.jp.

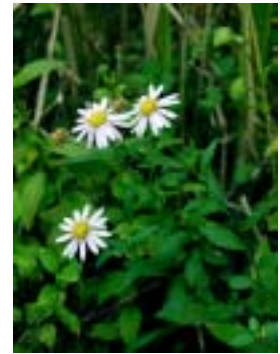
同じく、水田稲作による「モチ米」も残量は多くありませんが、1kg あたり500円の寄付金で希望者に配布いたします。希望者はkg 単位で小笠原さんに申し込んでください。

Tel/Fax:04-7169-6039 E-mail: kabukuri-saiko@jcom.home.ne.jp

ビオトープの植物調査

この一年間でビオトープの植物を調査した結果を、生育環境別に次のような区分で整理してみました。

第一は**湿地性の植物**です。1970年代まで名戸ヶ谷には広大な湿地があり、自然浄化された湧水が手賀沼に注いでいました。その湿地に生えていた植物がまだ残っています。**大型の湿地性植物**としてガマ類3種（ガマ、コガマ、ヒメガマ）ヨシ、マコモ、ウキヤガラ、クサヨシ、オギの8種があり、主にビオトープのBゾーン（稲作をしていない西側の湿地）に群生しています。—



カントウヨメナ

方、**小型の湿地性植物**が数多く生育しています。Bゾーンでは、イヌスギナ、オランダガラシ、イグサ、セリ、ミゾソバ、アシカキが比較的大きな群れを作って、大型植物とすみ分けています。この他にも、オオバタネツケバナ、アカバナ（左下写真）、アシボソ、サヤヌカグサ、コブナグサ、ホタルイが観察され、Aゾーンでは、アリアケスミレ、セキショウ、ミソハギが見られました。

第二は**稲作と共生する水田雑草**です。上記と同じ湿地性の植物ですが、水田稲作によって生育環境が与えられている植物です。主に稲作が行われるAゾーンの水田で見られる植物で、その多くは大昔に稲と共に外国からやって来たと考えられています。タネツケバナ、スズメノテッポウ、ケキツネノボタン、タガラシ、ウキヤガラ、コウガイゼキショウ、コモチマンネングサ、ウキクサ、アオウキクサ、オモダカ、チョウジタテ、アゼナ、アメリカアゼナ、ケイヌビエ、タカサブロウ、ジュズダマ、キクモ、イボクサ、コナギ、タウコギ、ヤノネグサ、ヤナギタデ、アゼガヤツリ、タマガヤツリ、ヒメクグ、メアゼテンツキ、カワラスガナ、ヒデリコです。上記の二つを合わせて、ビオトープに生育する湿地性植物の種類は51種になります。



第三は**人里植物**です。ビオトープを取り囲む斜面には数多くの人里植物が生えています。これらは湿地性植物ではありませんが、いくつかの植物がビオトープの湿地や畦道に進出してきています。該当するものとして、スミレ、オヘビイチゴ、ヘビイチゴ、ヒメヘビイチゴ、ノチドメ、ヒメジソ、イヌコウジュ、カントウヨメナ（右上写真）が挙げられます。また、ビオトープ周辺の斜面草地には数多くの人里植物が見られます。特に春にはオオイヌノフグリ、セイヨウタンポポ、ハルジオンなど美しい花が斜面を彩ります。しかし、残念なことに、夏から秋にかけては、草刈りが行われるため、外来種のイネ科が中心のやや殺風景な斜面になってしまいます。

アカバナ

第四は**樹木**です。ビオトープの周囲には若干の自生の樹木が見られます。コウゾ、ミツバアケビ、エノキ、ムクノキ、マユミ、ヌルデ、イボタノキ、ツタです。また、植栽ではありますが、昔はこの湿地に生えていたと思われるのがハンノキとネコヤナギです。

初年度の調査によって、ビオトープの植物相が予想以上に豊かであることが分かりました。この豊かな植物相を今後とも出来る限り護ってゆきたいものです。（佐々木 光正）

編集後記

「収穫特集」と銘打ちながら、この間にはさまざまな行事もありましたので、その報告も含めました。また、11月23日にはビオトープで生態系調査が行われましたが、その報告は次号にまわしたいと思います。植物観察会は春までお休み。連載の「花だより」に代えて、ビオトープの植物概観を佐々木光正氏にまとめていただきました。今回からシリーズ「名戸ヶ谷の昔」を連載します。

広報編集部